(個人用)

行政視察等報告書（個人用）

令和5年10月25日

知立市議会議長 様

報告者	岩城 道雄
日時	令和5年10月12日(木)～13日(金)
視察(研修)場所	青森県八戸市公会堂
目的	第85回全国都市問題会議 テーマ文化芸術スポーツが生み出す都市の魅力と発展に参加
<p>【概要】</p> <p>10月12日 基調講演 10月13日 パネルディスカッション</p> <p>【1日目】</p> <ul style="list-style-type: none">●東京芸術大学長 アーテスト 日比野克彦氏 アートの役割ってなんだろう？ アートとは生きる力」。時間に制御されてしまっている私たちの体の中の時間を柔軟に伸ばしたり、縮めたりする機能がある。人が人らしく生きていくためにとても重要な役割を持っている。またアートとは「多様性ある社会を築く基盤」である。また、アートは「社会的な課題に対して持続的に取り組み続けていくには大切な物である」という視点を持ち改めてアートの力を想像すると「ここには無い場所を想像することのできる力、一人一人の差異を、認め違いを否定する事なく、そこにいる事を排除しないという感覚。こうした感覚は現代社会を構築していくのに必要な大切な要素である。●青森県八戸市長 熊谷雄<ol style="list-style-type: none">1. 文化による町づくり 市民の多様で特色ある自主的な文化活動を「多文化」と定義し 市民や有識者による「多文化都市八戸推進会議」を立ち上げ、旧市街地の商業機能が衰退する課題に、新たな交流と創造の拠点として開館した八戸ポータルミュージアムはっちを作り、地域資源の魅力を生み出し、発信し、文化芸術、産業、観光、市民活動、子育て支援といった各施設を一体にして拠点と下活動を始めた。2. スポーツによるまちづくり 東北にありながら雪が少なく氷上のスポーツが盛んな八戸	

特徴を生かし、「八戸市長根屋内スケート場 YS アリーナ八戸」を整備してスケート競技を中心としてプロスポーツの育成に取り組んだ。アイスホッケー、バスケットボール、3x3 バスケ、サッカーの 4 種目のプロスポーツチームが八戸市に拠点を置くまでになっている。

文化の力、スポーツの力とは、人の「生きる喜び」に直接訴えるという本質的な価値に触発され、感動、喜び、創造性、表現力、共感、健全な心身、精神的充足感をもたらすことができ、市民の間に共有一体感を生み出すことが出来る。

これらを実現する鍵は、(1) 地域資源を生かす拠点とネットワークを作ること(2)関心やテーマに基づくコミュニティと当事者を増やすことである。

●まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用

株式会社鹿島アントラーズ FC 取締役副社長 鈴木秀樹

(1)全国に広がるプロスポーツクラブ

プロスポーツクラブが広がった大きなきっかけは、1993 年 10 チームで始まった Jリーグである。その後 3 年の歴史を経て 60 チームにまで増加した。この間他のスポーツでもプロチームプロリーグの発足が相次ぎ、ラグビー、バレーボールの Vリーグ、バスケットボールの B リーグ、卓球の Tリーグなどができて、プロチームは 100 を越えるほどの規模に成長した。一方プロチームの本拠地としている自治体はプロスポーツの地域貢献という点で、十分なビジョンを持っていないし、それ故活用がされていない。

(2)鹿島アントラーズと地域との深いつながり

茨城県のこの地域は半農半漁の村から、1960 年代に始まった鹿島臨海工業地帯の開発により、大規模な鉄鋼業、石油化学工業などの工場群、火力発電所が立ち並ぶ工業の街になる。一方近隣に娯楽施設がなく若者の首都圏への流失が社会問題になっていく。こうした中、近隣の 3 町と「新しい街づくり懇談会」を立ち上げ、魅力ある町となるような議論が重ねられ、当時日本サッカー協会の Jリーグ構想に着目し、99%不可能と言われながらも、住友工業蹴球部をプロ化し、屋根付きサッカースタジアムを建設し 1993 年のリーグ参加を実現した。こうした経緯から創業時からホームタウンの自治体が出資母体としてきた。今や Jリーグ中最多の 20 冠を重ね、地域へのリターンも経済効果ばかりでなく、シチズンシップの醸成も含め、大いに寄与している。

(3)鹿島アントラーズによる地域の社会課題解決

社会課題の解決はプロスポーツクラブだけでは出来ない。しかし、スポーツクラブには多種多様な人材、企業とのつながりがあり、そうした存在を巻き込むことにより社会課題の解決が可能になる。クラブを、地域を変える機能をもつ装置として捉えてることがクラブの持つ利点を活かすことが出来る。

(4)プロスポーツクラブを有効に使い切る

自治体からみるとプロスポーツクラブにはまちづくりに繋がる様々な使い道がある。近年驚異的な技術革新が進み IT 利用により、顧客データの活用がある。ファンの消費行動、商品の購入、健康管理試合に足を運んでくる人のビッグデータは、自治体のアンケートなどよりもはるかに多数のデータであり、素直なデータである。また、クラブチームを朝とした様々な活動は、他の分野の活動にも刺激、ヒントを与え、次なる活動の水先案内も務める。そうした環境を作りあげた全国にある先進市から学び各自治体の特色を生かした地域作りに結びつけば、自治体の活性化、住民の幸福につながる。

●地域活性化におけるスポーツの役割とその変化

拓殖大学商学部教授 松橋崇史

(1)地域活性化とトップクラブ

1993 年開幕した Jリーグはその理念に「地域密着」を掲げ、クラブ名も「地域＋愛称」にし、具体的行動方針を掲げた。その大きな課題は地方自治体が有するスタジアムをホームスタジアムとして利用しようと、改修、修繕、建て替えを促していくことであった。

順調にスタートしたかに見えた Jリーグだったが、1990 年代後半には親会社の経営不調やクラブの消滅などもあった。この状況下で「地域密着」が経営戦略として浸透していく事になる。東京ヴェルディーや川崎フロンターレのように、親会社に依存しない経営モデルを確立するクラブも出てくる。バンフォーレ甲府のように、経営不調を地元サポーターとの密着度を重視し経営モデルを確立するケースも出てきた。それは地元経済に精通する人材を経営人に加え地域からの支援を受けやすい小口協賛、ボランティア援助などで立て直した。これは、我が地域にもプロクラブ創出を」と考えていた地域を大いに勇気づけた。その後のプロクラブ、リーグ設立のモデルとなり、プロ野球以外のプロチームが多数生まれる基礎となった。

(2)地域活性化とスポーツ政策

1970 年代以降高度成長期に都市部に流入した人々が新たな町を作るときに行政主導のスポーツ教室から、サークル活動として始まった。幾らかの大都市圏でそれらはさらに規模の大きな活動になっていく。そのきっかけを作ったのが、国民体育大会での、地域受入スポーツが根付くことであった。ホッケー競技が最たる者だが、最近でもオリンピックの海外選手団の受入から始まった競技、地元出身が活躍したことがきっかけになるケースもある。

(3)スポーツの魅力とは何か？

スポーツの魅力は、市民にとっては競技する事で健康に役立つ事、競技力の向上で充実感が味わえる事、仲間が増え、生活の分野で広がりができること、未知の場所に行く事、家族の話題提供等さまざまなことがある。ではプロスポーツの魅力とは何か？「全力」を可視化することである。日常生活で人々は全力で取り組むことは多い。しかしながら、それらは可視化して教論することは難しい。

可視化して共有する事で、物語を共有でき、感動も共有出来る。自分の身の回りにかぎらないで、より多くの人達と連帯感をもてるし、感動を共有できる、一体感が生まれる。応援するチームの勝ち負けは喜びを与えるし、落胆に終わることも多い。それらを通して、生きる上での感情の共有ができる。たかがスポーツ、されどスポーツである。

【所感、知立市政への反映に向けた課題等】

今回のテーマは知立市にとっても重要なテーマです。街の活性化は其々の地域の特色を生かし、各町が独自にテーマ、理念を決め、それに沿った具体案を作成し実行するけれど、背骨になり、実現可能性まで見通しながらのテーマ設定は難しい。

今回のテーマ、スポーツを通じた街の活性化、芸術を街づくりの柱にするというようなことは、企業誘致や、住宅地域の造成などをテーマにするのとは違い一般的には理解され難い。しかしながら今はいくつもの事例が示すように、スポーツの力が街づくりに貢献することは明らかである。が、沢山の事例があるとは言え、まだまだ、それが一般的には認知され難い。名鉄の連続立体交差事業を進め、同時に駅前地域の再開発を本市の魅力づくりには、身の丈よりも少し大きいかも知れないが、スポーツなり芸術なりを街づくりの一端に組み入れることは、必要ではないか。交通の利便性の良さを活かし周辺都市から知立市に来たくなるようなツールとのひとつとして、一見、突飛なように感じるスポーツ、芸術を使った魅力作りが必要なのではいか？と考えられた。これからの政策等考える上で、ほかの要素も考えながら、今回の研究会で学んだことを生かしていこうと感じた。このような点で、非常に有効な研修会だったと感じている。

※報告書は視察（研修）場所ごとに作成してください。

報告書は視察（研修）終了後1週間以内に提出してください。